研究主題「文学的な文章を読む力を高める指導の工夫
－登場人物を理解する学習過程を通して－」

東京都教職員研修センター研修部授業力向上課
調布市立調和小学校　主任教諭　星　彰

第１　研究のねらい

小学校学習指導要領(平成 20 年３月告示)国語科「Ｃ読むこと」の指導事項には、全学年で登場人物を重点的に扱うように示されている。しかし、平成 22 年度全国学力・学習状況調査報告書において「文学的な文章に登場する人物を相互に関係付けて読むことに課題がある」ことが明らかになった。

文学的な文章の指導について、教員は教材研究を基に様々な指導の工夫を行っている。しかし、上述の報告書からは、指導の工夫が児童の文学的な文章を読む力の育成に結び付いていないことが考えられる。これは、教員が重要であると考えて指導していることが、必ずしも児童にとって重要であると理解されていないことに起因すると考えた。

そこで、本研究では、文学的な文章の指導上の課題を解決するために、教員の指導の実態と児童の学習活動に対する意識の差を明らかにし､その課題を基に指導の工夫を探ることとした。そして、児童の学習活動に対する意識を高めるためには、叙述を根拠に登場人物を理解することが必要であると考え、登場人物を理解するために必要な叙述に着目するための「視点」を整理し、それらを活用した学習過程を開発することにした。それにより、児童は意欲的に学習を進めることができ、文学的な文章を読む力を高めることができるようになると考えた。

第２　研究の内容と方法

１　研究仮説

「登場人物を理解するための視点」を活用する学習過程を展開することにより、叙述を根拠に登場人物を理解する力が身に付き､文学的な文章を読む力を高めることができるであろう。

２　基礎研究

「登場人物を理解するための視点」(以下､「視点」と表記。)を整理するために小学校学習指導要領解説国語編(平成 20 年８月)､文学的な文章の指導に関する先行研究を踏まえ､各学年で学習する文学的な文章の分析を行った。その結果、登場人物の理解を深めるための叙述を６つの視点に分類することができた(表１)。

表１　登場人物を理解するための視点

	言葉			表現方法		
視点	名詞	形容詞	動詞	文末	強調	逆接
活用の手がかり	・登場人物の様子などを表す言葉に着目する。	・登場人物の性格や心情に結び付く言葉に着目する。	・登場人物の行動に着目する。	・登場人物の行動を表す文末表現に着目する。	・登場人物の様子や行動を具体的に描写している言葉に着目する。	・登場人物の行動が変化する時に用いられる言葉に着目する。

３　調査研究

教員の指導と児童の意識に差がある学習活動を明らかにするために、平成 23 年７月、都内公立小学校第４・５・６学年の児童 666 名、小学校教員 40 名を対象に、文学的な文章の授業において重要であると考える 20 項目の学習活動について、四件法で次のように質問した。

教員…「物語を読む力を高めるために、次の学習活動をさせていますか。」

児童…「物語がよく分かるようになるためには、次の学習が必要だと思いますか。」

この調査結果について有意差検定を行い、教員の指導と児童の意識に有意差がある学習活動を明らかにした(表２)。

そして、これら三つの学習活動(登場人物の心情を考える、登場人物の言動の理由・目的を考える、自分の考えを発表する)について考察を行った。

表２　教員の指導と児童の意識に有意差がある学習活動（７月）

教員の指導と児童の意識に有意差がある学習活動	教員	児童
・登場人物の心情を考える	83	70
・登場人物の言動の理由・目的を考える	70	53
・自分の考えを発表する	70	47

※　教員の数値は「１重点的に指導している」と回答した割合(%)
児童の数値は「１必要だと思う」と回答した割合(%)

アンケートの数値から、これらの学習活動について、教員は重要であると考えて指導していることが分かる。しかし、児童は学習活動の目的を十分に理解していない、学習活動を行っても達成感を十分に得られていないことが考えられる。また、児童同士が考えを認め合い、読みの深まりを実感するような場面が十分に設定されていないことが考えられる。

これらの課題を解決するために、学習過程の開発に取り組むことにした。

４　開発研究

(1) 登場人物を理解する学習過程

「登場人物を理解する学習過程」を、小学校学習指導要領(平成 20 年３月告示)国語科「Ｃ読むこと」の「文学的な文章の解釈」の指導事項に基づいて開発した(表３)。

学習過程の開発に当たっては、調査研究の課題を踏まえ、児童が目的をもって学習できること、登場人物を理解できた達成感を得られること、読みの深まりを実感できることを重視した。そのためには課題を解決していく学習過程が有効であると考え、次のような手だてを工夫した。

表３　登場人物を理解する学習過程(例)

次		学習活動
第１次		○　単元のめあてを知る。あらすじをまとめる。
第２次	課題設定	○　登場人物の行動に着目し、三つの課題を作る。
	課題解決	○　課題1　文章の前半における人物像を捉える。
		○　課題2　人物の変容のきっかけを捉える。
		○　課題3　文章の後半における人物像を捉える。
	交流	○　課題解決を通して捉えた人物像を交流する。
第３次		○　学習したことを生かして、関連する本を読む。

まず課題設定を行う。児童には①文章の前半における人物像、②人物の変容のきっかけ、③文章の後半における人物像の３点に関わる登場人物の行動に着目し、課題１～３を作らせる。それにより児童は見通しをもち、登場人物の心情の変化を捉えるという明確な目的をもって学習できると考えた。

次に、一つの課題に対して１時間ずつ段階的に登場人物の理解を深めていく。その際、叙述を根拠として課題を解決できるよう、言葉や表現方法などの「視点」(表１)を活用して叙述に着目させる。課題１に対しては、教員が「名詞」「強調」などの「視点」を活用して叙述に着目する方法を示し、児童に「視点」の活用方法を理解させる。課題２、課題３に対しては、教員は必要に応じて助言するにとどめ、児童自身が「視点」を活用して叙述に着目できるようにさせる。それにより、児童が自ら叙述を根拠に登場人物を理解できるようになると考えた。

最後に、課題１～３を通して捉えた人物像について交流する。児童には、捉えた人物像につ

いて互いの考えを認め合えるよう、根拠となる叙述を明らかにしながら自分の考えを発表させる。それにより児童は、叙述に基づいて登場人物を様々な見方で捉え、読みの深まりを実感できるようになると考えた。

(2) 「視点」（表１）を活用した展開例

本研究では、課題を解決することを「登場人物の行動の理由・目的を具体的に示した『読みの具体的な目標』に到達すること」と捉えた。教員は「読みの具体的な目標」に到達するために「文末」などの「視点」を手掛かりにして必要な叙述を選び出し、叙述を根拠に「読みの具体的な目標」に到達できるように学習計画を立てる。次に、課題１の展開例を示す（表４）。

導入で、児童は課題に対する自分の考えをノートに書く。

展開で、児童は次のように「視点」を活用して課題を解決していく。まず児童は、①教員から示された「名詞」や「強調」などの「視点」で課題を解決していくことを理解する。次に児童は、②「視点」を基に根拠となる叙述に着目する。そして児童は、③叙述の意味を、辞書を利用して調べたり、叙述を基に話し合ったりしながら、登場人物の行動の理由や心情などを明らかにしていく。

表４　「視点」を活用した展開例（課題１）

	学習活動（文章の前半における人物像を捉える）
導入	○　課題に対する自分の考えをノートに書く。
展開	《視点の活用》 ①　教員から示された「視点」で課題を解決していくことを理解する。 ②　「視点」を基に根拠となる叙述に着目する。 ③　叙述を基に課題について話し合う。
まとめ	○　課題に対する自分の考えを再度ノートに書く。 ○　「視点」の活用方法を復習する。

まとめで、児童は課題に対する自分の考えを再度ノートに書く。これにより、導入での考えと比べて読みが深まったことを実感できると考えた。また、課題２、３の課題解決においても「名詞」や「強調」などの「視点」の活用方法を繰り返し学習することにより、児童は「視点」を自ら活用して叙述を根拠に登場人物を理解することができるようになると考えた。

５　検証授業

都内公立小学校第４学年で「ごんぎつね」を教材として検証授業（５時間扱い）を実施した。

(1) 学習指導計画の概要

「登場人物を理解する学習過程」に基づき学習指導計画を作成し、授業を行った（表５）。

表５　「ごんぎつね」の学習指導計画

	時	学習活動	・活用する「視点」	◆　読みの具体的な目標
課題設定	1	○　登場人物の行動に着目し、三つの課題を作る。		
課題解決	2	課題1　前半における人物像を捉える。 「何のために、ごんはいたずらばかりするのか」	・「名詞」ひとりぼっち ・「強調」～も、ばかり	◆　ごんのいたずらの目的は、人にかまってもらうためであることを読み取る。
	3	課題2　人物の変容のきっかけを捉える。 「何のために、ごんは兵十にくりをあげたのか」	・「名詞」つぐない ・「文末」～てやりました。	◆　ごんが兵十にくりをあげた目的は、自分のやっていることに気付いてもらうためであることを読み取る。
	4	課題3　後半における人物像を捉える。 「何のために、ごんはその明くる日もくりを持って出かけたのか」	・「強調」～も、こっそり	◆　ごんがその明くる日も兵十にくりを持って行く目的は、自分の罪をつぐなうためであることを読み取る。
交流	5	○　課題解決を通して捉えたごんの人物像について交流し、自分の考えを深める。		

(2) 「視点」を活用した授業の実際

課題解決の２時間目（表５の太枠部分）は「名詞」、「強調」の２つの「視点」を活用し、次のように授業を行った（表６）。

表６　「ごんぎつね」検証授業第２時の展開

	学習活動　（下線は、「視点」に基づいて着目した叙述）
導入	○　課題1「何のために、ごんはいたずらばかりしたのか」に対する自分の考えをノートに書く。
展開	《視点の活用》 ①「名詞」、「強調」という「視点」で課題を解決していくことを理解する。 ②「視点」を基に、「ひとりぼっち」、「夜でも昼でも」の叙述に着目する。 ③「ひとりぼっち」、「夜でも昼でも」の叙述を基に課題について話し合う。 ・ごんが「ひとりぼっち」なのは、両親がいなくなってしまったからだと思う。きっと寂しいだろう。 ・人に見付かってしまう危険な昼にいたずらするのは、人にかまってほしいからだと思う。
まとめ	○　課題1に対する自分の考え(文章の前半におけるごんの人物像)を再度ノートに書く。 ○「視点」(「名詞」「強調」)の活用方法を復習する。

(3) 検証授業の分析と考察

ア　「登場人物を理解する学習過程」と登場人物の理解の深まり

・　アンケート調査における変容

授業を行った児童 33 名に調査研究と同様の調査を行った結果、表２に示した「登場人物の言動の理由・目的を考える」「自分の考えを発表する」については、児童の意識が、教員の指導と同じ程度にまで上昇した。このことから、児童は検証授業で行った学習活動に必要性を感じることができ、教員の指導と児童の意識の差が解消されたと考えられる。

・　ノート記述における変容

「視点」を活用して根拠となる叙述に着目し、読みの具体的な目標に到達した児童Ａのノート記述を分析した。１時間目には、ごんに対して「悪いのか優しいのかよく分からない。」と書いているが、課題解決後には「不器用なだけで、本当は優しい。」、交流後には「自分が悪いことをしたと思ったら、強く責任を感じて行動するきつね。」と書き、人物像を具体的に捉えるようになった。このことから、「登場人物を理解する学習過程」に基づいた授業により、叙述を根拠に登場人物を理解できるようになると考えられる。

イ　「視点」の活用と登場人物の理解の深まり

・　教科書の書き込みとノート記述の変容との関連

教科書の書き込みから根拠となる叙述に着目した児童及びノート記述が「読みの具体的な目標」に到達した児童を調査した。根拠となる叙述を自力で見付けた児童は４人から 24 人に増加した。そのうち、「読みの具体的な目標」に到達した児童も３人から 18 人に増加したことから、「視点」の活用により登場人物の理解が深まったと考えられる。

第３　研究の成果

○　「登場人物を理解する学習過程」に基づいて授業を行うことにより、児童は目的をもって学習に取り組めることが実証できた。また、登場人物の心情を理解し、読みの深まりを実感するために有効であることが分かった。

○　「視点」を活用することにより、児童は課題に対して叙述を根拠に考え、登場人物の理解を深められることが分かった。

第４　今後の課題

○　「登場人物を理解する学習過程」に基づいた年間指導計画や、各学年での実践事例集を作成し、文学的な文章を読む力を系統的に高めることができるようにする。

○　校内研究や国語科の研究会など様々な機会を通じて「登場人物を理解する学習過程」に基づいた実践事例を紹介し、文学的な文章を読む力を高める指導の工夫を広めていく。